

頌栄短期大学標本の登録・整理 標本の登録・整理を通じた 生物多様性の基礎情報蓄積

2012年、頌栄短期大学(兵庫県神戸市)から所有する植物標本(頌栄標本と呼ぶ)の寄贈を受けました。この頌栄標本は、同大学の植物分類学を専門とする歴代の教授により約40年前から収集整理、保管、教材化などが進められてきたものです。多くの在野の植物研究者や愛好家らによって採集された、兵庫県産の貴重種や絶滅危惧種の標本を多数含んでおり、総数約25万点の標本群は、極めて学術的価値の高い資料です。ひとはく所蔵の既存標本と合わせて兵庫県産の維管束植物を網羅した目録(1999~2009年にかけて研究紀要「人と自然」で出版済み)や多くの学術論文の証拠標本(※)として引用され、また兵庫県版レッドデータブックの基礎資料としても用いられてきました。兵庫県や周辺地域に生育する植物を調べようとする上で、頌栄標本は必要不可欠な重要標本です。

頌栄標本の種名、産地、生育状況などの情報は、ひとはく収蔵品データベースに順次登録されています。また、インター



1. 標本寄贈時の運び出し作業 植物愛好家のボランティアにより作業が行われた 2. 県版RDBに掲載されている絶滅危惧種の標本シマサルナシ(Bランク)

※証拠標本: 学術研究のために調べた個体を研究の証拠として標本化し、後日の再調査が可能のように保管されている標本

ネットを介して世界中から誰でも自由に閲覧・利用できる情報システムであるGBIF(地球規模生物多様性情報機構)へも提供され、蓄積されつつあります。「どこに、どんな植物がどれくらいあるのか」という生物多様性の基礎情報が蓄積されることにより、たとえば日本の固有植物の現状把握などが可能となり、外来生物の侵入リスク評価や、絶滅危惧種保全のための効率的な保護区の設定といった政策決定にも役立てられる重要な情報となります。

頌栄標本は質・量ともにその役割を十分に果たすものであり、今後の整理・登録の進展が期待されています。

自然史レガシー継承・発信事業

新たな空間、手法での展示などを通して 自然史資料の可能性を プレゼンテーションする

自然史資料の収集は、地域の自然環境情報を確たる証拠となる実物と共に蓄積していく行為であり、現在の自然の姿を未来の世代に正しく伝える重要な資源となるものです。しかし、自然史資料の価値や資料を集めることの重要性は、残念ながら広く社会に認知されているとはいえません。

ひとはくが文部科学省の委嘱を受け、国内の自然史系博物館8館と連携して進めてきた「自然史レガシー継承・発信事業」は、自然史資料の重要性をより強く社会へアピールするため、表にある3事業を実施しました。

①の企画展で行ったアンケート調査の結果、30~40代の来場者が多く、巡回展や次回実施を望む声が多く聞かれました。②の海外視察報告WSには広報が直前になったにもかかわらず、遠く関東や四国からも参加者が来られました。次年度以降も、ICOM日本初開催を目前にして博物館に注目が集まるこの機会に、自然史資料の重要性を訴えていきたいと考えています。



1. 坪庭と哺乳類はく製 2. 海外視察ワークショップ

自然史レガシー継承・発信事業

①2019年にICOM(※)開催が予定される京都で町家を借り上げ、文化を支えた自然をテーマとした企画展「日本文化を育んだ自然 Where culture meets nature」を開催

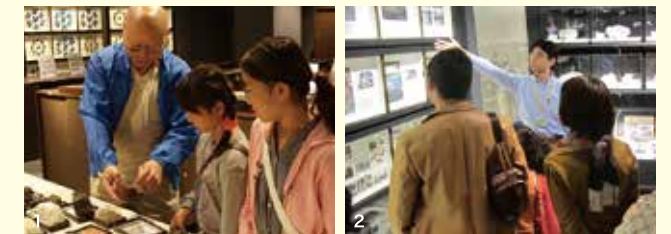
②海外各国の自然史博物館を視察し、収蔵庫の管理運営方法と収蔵展示等について知見を深め、その報告会をワークショップ形式で2017年2月3日に実施

③巡回する会場毎に新たな展示が付加される、スパイラルアップ型展示を目指した巡回展「驚異の螺旋生物 魅力あるカタツムリの世界」を、橿原市昆虫館を起点にひとはく他2館で実施

※ICOM: (International Council of Museums 国際博物館会議)は、1946年に創設された136カ国20,000館、35,000人以上の会員からなる非政府機関です。ユネスコと協力関係にあり、国連では経済社会理事会の諮問資格を有しています。119の国内委員会と30の国際委員会からなり、それぞれに年次大会等を通じて情報や知識の交換・共有が図られています。3年に一度全ての委員会が一堂に会する大会が開催されており、今回は2019年に日本で初めて、京都で開催される予定です。

『魅せる収蔵庫トライアル』がオープン 収集資料を展示に活かし、魅せる 本物に触れる学びの場の整備

2012年、開館20周年を記念し本館2階に新しく「ひとはく多様性フロア-魅せる収蔵庫トライアル」を開設しました。記念式典では秋篠宮さまをご案内して新しいフロアをご見学いただき、翌日の一般公開では研究員による演示(※)を実施。たくさんの来館者と一緒にフロアのオープンをお祝いできました。このフロアのねらいは、ひとはくが20年かけて収集した資料を活用し、来館者が本物の標本や資料に触れて、自然界の多様性を学べる場を新たにつくることです。さらに、ひとはくの新館構想の目玉である「魅せる収蔵庫」を試行し



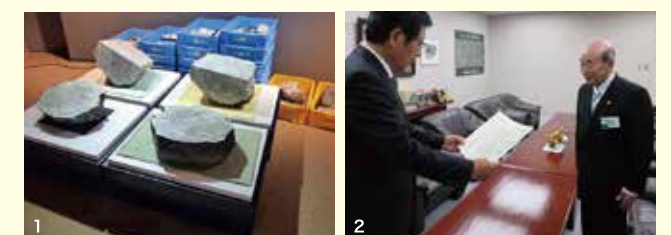
1,2. 研究員自らが展示物を解説する

て、構想の実現を図っていきねらいもあります。これからも、標本や資料を増やしたり、コーナーを広げたりと、少しずつですが、ひとはくでしかできない「本物に触れる学びの場」の充実を進めていければと考えています。

※演示: 来館者とモノ、来館者と空間との間に人が介在することで、興味や参加を促す手法。

常設展に新展示「ひょうごの岩石と鉱物」がオープン 寄贈された「クドウ地科学コレクション」 を活用し兵庫県の鉱山・鉱石を解説

2015年度に朝来市在住の工藤智巳氏から300点を超える岩石・鉱物標本からなる「クドウ地科学コレクション」を寄贈いただきました。このコレクションは、大屋町加保坂(かほさか)の白いヒスイ輝石岩(兵庫県指定天然記念物)を含む但馬地方の代表的な岩石・鉱物や、生野、明延、中瀬などの兵庫県の代表的な鉱山から産出した鉱石を主体としており、兵庫県の岩石・鉱物を理解するうえで価値の高いものです。そこでひとはくでは、「クドウ地科学コレクション」を活用し、常設展示室に「ひょうごの岩石と鉱物」コーナーを新設し



1. 寄贈いただいたクドウ地科学コレクション。手前は4つに切断、研磨した白いヒスイ輝石岩の大型標本 2. 中瀬 勲館長より感謝状を授与される工藤智巳氏

ました。ヒスイ輝石岩を切断、研磨した美しい標本や、自然蒼鉛(そうえん)、錫石鉱(すずいしこう)、紅砒(こうひ)ニッケル鉱、櫻井鉱などの鉱石を多数展示するとともに、兵庫県の鉱山や鉱石についても解説を加えています。

羽田コレクション (カリバチ・アナバチ標本約4万点)を寄贈受託 世界に誇れるハチ類コレクションが さらに強化

ひとはくのハチ類コレクションは、日本のハチ・アリの研究の先駆者である常木勝次博士、岩田久二雄博士、坂上昭一博士のタイプ標本や研究資料を含むおおよそ20万点の標本からなり、当館が世界に誇れるコレクションになっています。2016年度には、常木博士から指導を受けハチ研究者になられた羽田義任氏の4万点に及ぶハチ類標本(羽田コレクション)の寄贈をいただきました。この羽田コレクションには日本産カリバチ・アナバチ全種のオスとメスの標本が含まれています。ひとはくでは今後もハチ類コレクションの整理を進



1. 寄贈されたハチ類スケッチ(岩田久二雄博士) 2. 整理した羽田コレクション

めるとともに、魅せる収蔵庫への活用などを図るよう収蔵庫の拡張にも取り組み、コレクションの研究や展示・生涯学習への活用に取り組んでいきます。